

平成 21～22 年(2009～2010)
個展を前提とした作品制作研究(18)
第18回個展・佐喜眞美術館 in Ginowan

金城 満

1. 展覧会名:

金城満展2009 -Triple Sugar 「ぬけがらの音」-

2. 趣旨:

1609年薩摩侵攻から400年。それは沖縄の魂にとって何だったのか。金城満氏が美術の言葉で表現しました。今回の企画は、「痕跡のあと」(1992年11月)と「Sweet400」(2009年1月)、二つのシリーズで構成されています。ことば、音、闇など、共通のテーマを持つ両シリーズを比較展示し、さらに最新作 -Triple sugar- 「ぬけがらの音」からは軋む残響がこだまして、沖縄の「今」をのぞき込むようでもあります。(美術館展示会案内より)

3. 材料技法

ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、テンペラ、油彩

4. 展覧会場

佐喜眞美術館 〒901-2204 沖縄県宜野湾市上原 358

5. 展覧会期

2009年10月07日(水)～2010年01月18日(月) 休み:火曜日、年末年始休館※85日間

6. 開館時間

09:30～17:00

7. 観覧料金

美術館入館料(大人700円 中高600円 小人300円)

8. 企画

佐喜眞美術館

9. 作品リスト (pp. 5-30)

No.	作品名	サイズ(cm)	材 料	制作 年月	備 考
141	シリーズ「痕跡のあと」Ⅰ	83.0 x 116.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
142	シリーズ「痕跡のあと」Ⅱ	83.0 x 116.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
143	シリーズ「痕跡のあと」Ⅲ	99.0 x 136.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
144	シリーズ「痕跡のあと」Ⅳ	116.0 x 136.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
145	シリーズ「痕跡のあと」Ⅴ	116.0 x 136.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
146	シリーズ「痕跡のあと」Ⅵ	116.0 x 136.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
147	シリーズ「痕跡のあと」Ⅶ	116.0 x 136.0 cm	ナンピ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
148	シリーズ「痕跡のあと」Ⅷ	133.0 x 406.0 cm	杉材、ニカワ、顔料、箔、テン ペラ、油彩	1992年 2009年	第10回個展 第18回個展
271	Sweet400-blue sugar-	116.0 x 180.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
272	Sweet400-red sugar-	116.0 x 180.1 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展

273	Sweet400-double sugar-	210.0 x 360.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
274	Sweet400-brown sugar-	128.0 x 180.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
275	Sweet400-sugar coat1-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
276	Sweet400-sugar coat2-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
277	Sweet400-sugar house1-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
278	Sweet400-sugar house2-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
279	Sweet400-sugar house3-	60.0 x 90.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展
280	Sweet400-Triple sugar-	233.0 x 480.0 cm	顔料、ニカワ、箔、油彩、板	2009年 2009年	第17回個展 第18回個展

10. 関連イベント (pp. 32-33)

アーティスト・トーク

日時＝2009年11月23日（月）16:00～

会場＝佐喜眞美術館

出演＝金城満

11. 考察（報道等資料）（pp. 34-40）

- (1) 沖縄タイムス 2009. 11. 06 10月美術月評/言葉の異物で緊張感
(美術批評家、沖縄県立芸術大学講師/土屋誠一)
- (2) 沖縄タイムス 2009. 11. 23 展評/生の具体性体験させる
(グループ Z0 同人/山田 高)
- (3) 琉球新報 2009. 12. 16 展評/時空超え心の目で対話
(近代沖縄洋楽受容史研究、沖縄県立芸術大学講師/三島わかな)
- (4) 琉球新報 2009. 12. 22 あしやぎ/「甘いかゆみ」金城満
- (5) 沖縄タイムス 2009. 12. 28 年末回顧県内⑥美術
(沖縄県立芸術大学非常勤講師/佐藤文彦)
- (6) 琉球新報 2010. 11. 13 12月美術月評/苦闘する作家の生气
(沖縄県立芸術大学教授/田中睦治)
- (7) 信濃毎日新聞 2010. 01. 29
金城満さん抽象画「Sweet400」浮かぶ沖縄の閉塞感

金城満展 2009 —Triple sugar— 「ぬけがらの音」



—Triple sugar— 「ぬけがらの音」 233×480cm 2009年 顔料、ニカワ、箔、油彩、板

佐喜眞美術館

金城満展 2009 —Triple sugar— 「ぬけがらの音」

1609年薩摩侵攻から400年。それは沖縄の魂にとって何だったのか。金城満氏が美術の言葉で表現しました。今回の企画は、「痕跡のあと」(1992年11月)と「Sweet400」(2009年1月)、二つのシリーズで構成されています。ことば、音、闇など、共通のテーマを持つ両シリーズを比較展示し、さらに最新作・Triple sugar-「ぬけがらの音」からは軋む残響がこだまして、沖縄の「今」をのぞき込むようでもあります。



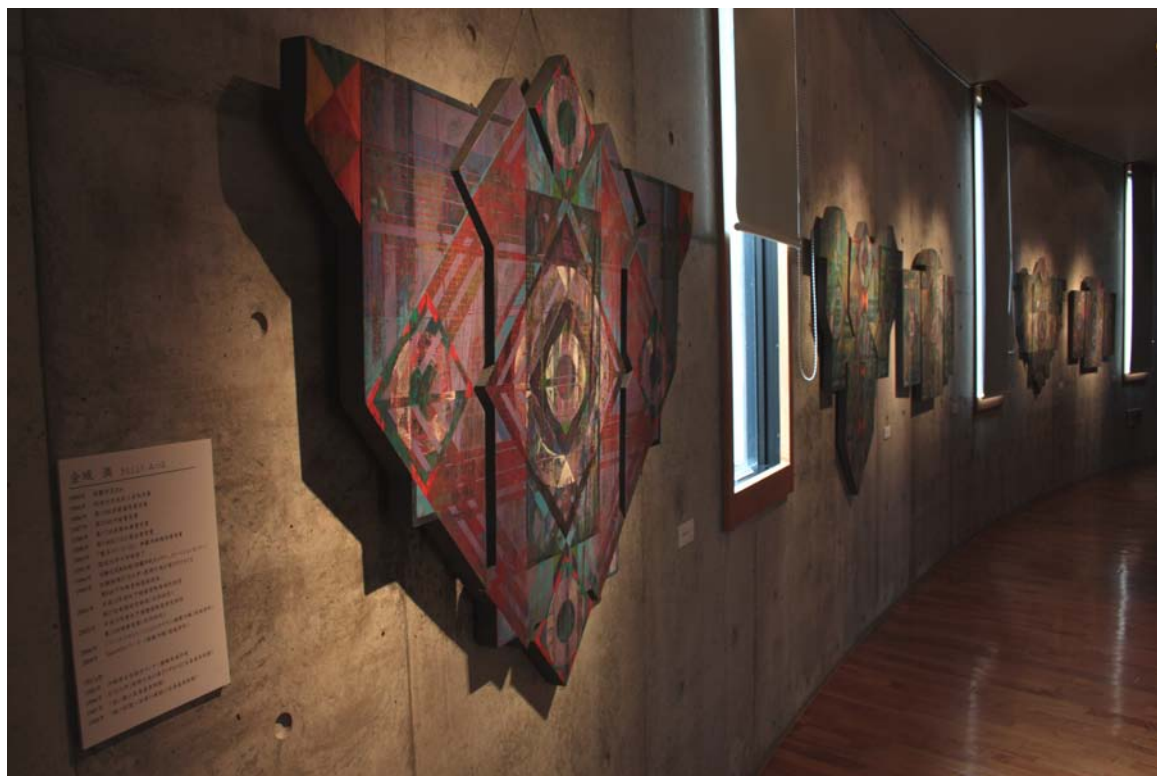
〒901-2204 沖縄県宜野湾市上原 358
TEL 098-893-5737 FAX 098-893-6948
入館料 大人 700円 中高 600円 小人 300円

2009 10/7 水 — 2010 1/18 月
開館時間 AM9:30～PM5:00 (火曜休館)
11/23 (月) 午後4時～アーティスト・トーク

佐喜眞美術館
<http://sakima.jp>





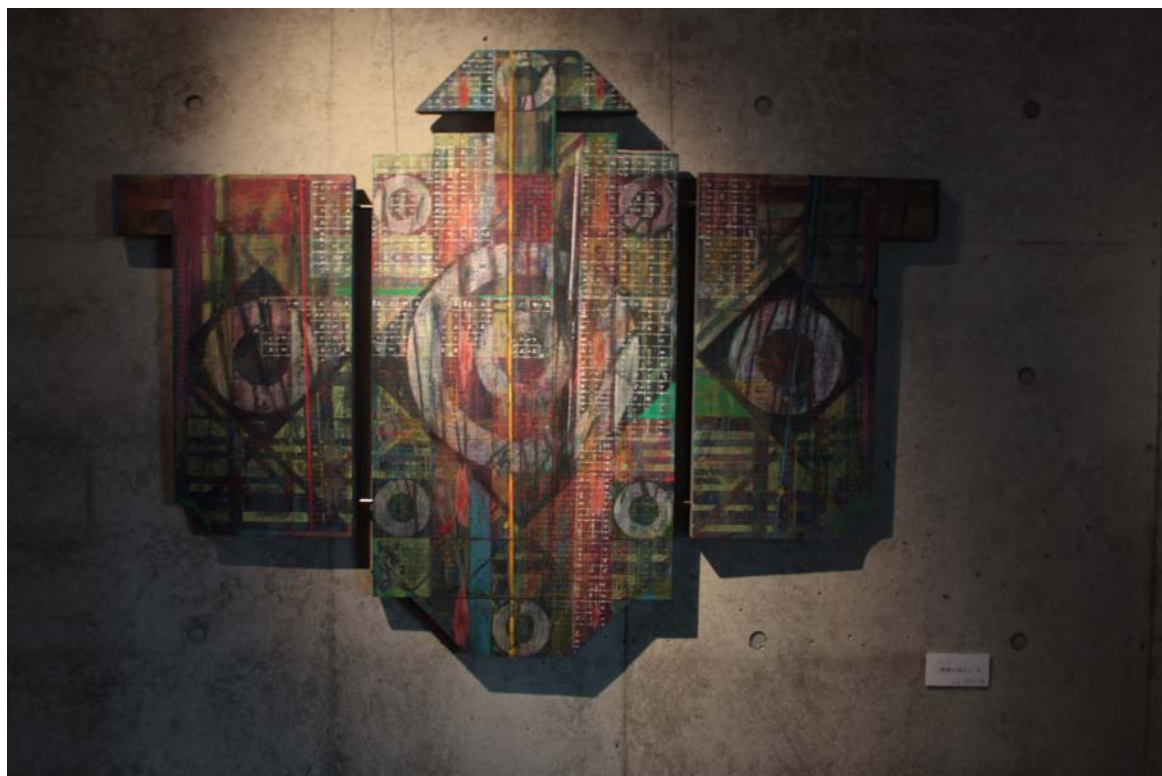




















SWEET400-TRIPLE SUGAR-「ぬけがらの音」

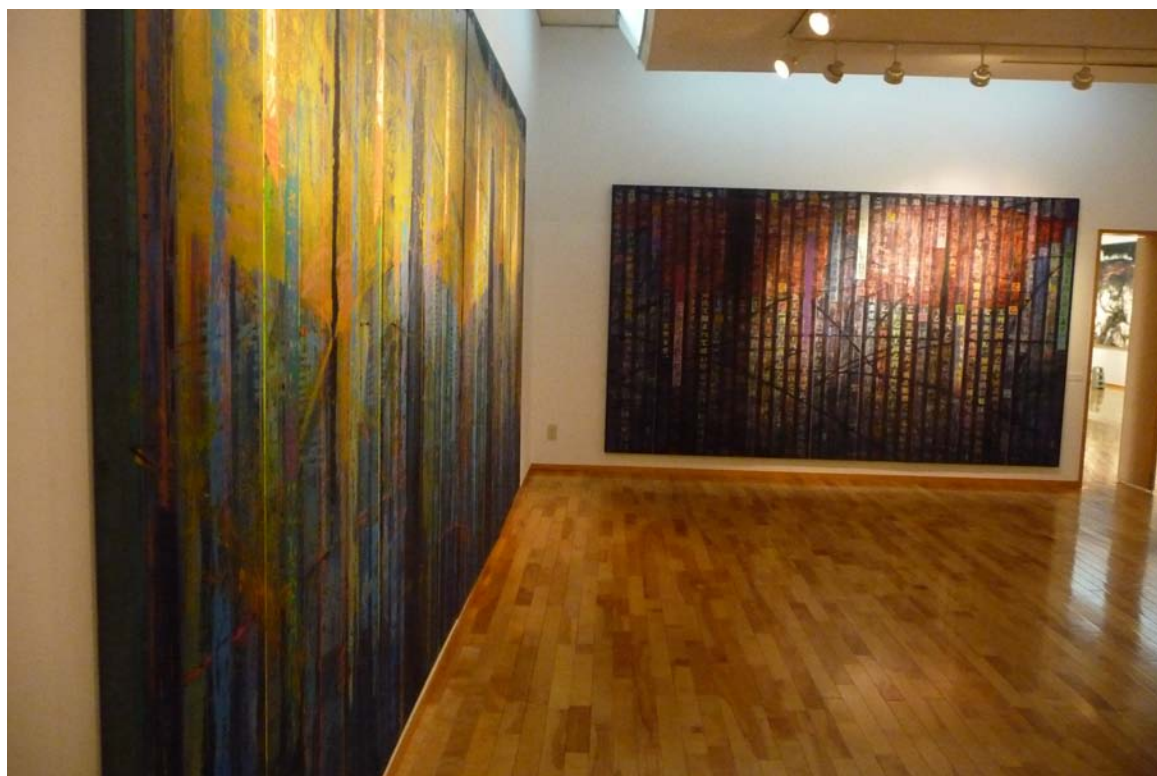
各233×480cm 2009年顔料、
ニカワ、箔、油彩、板



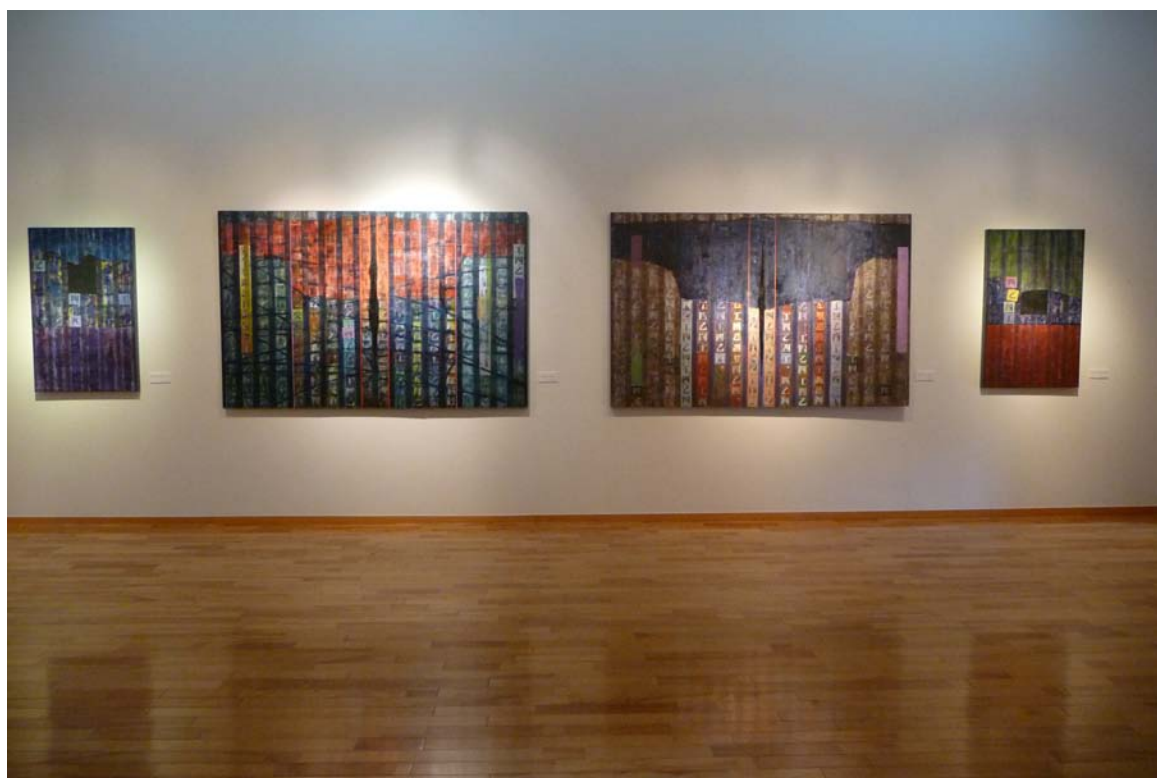








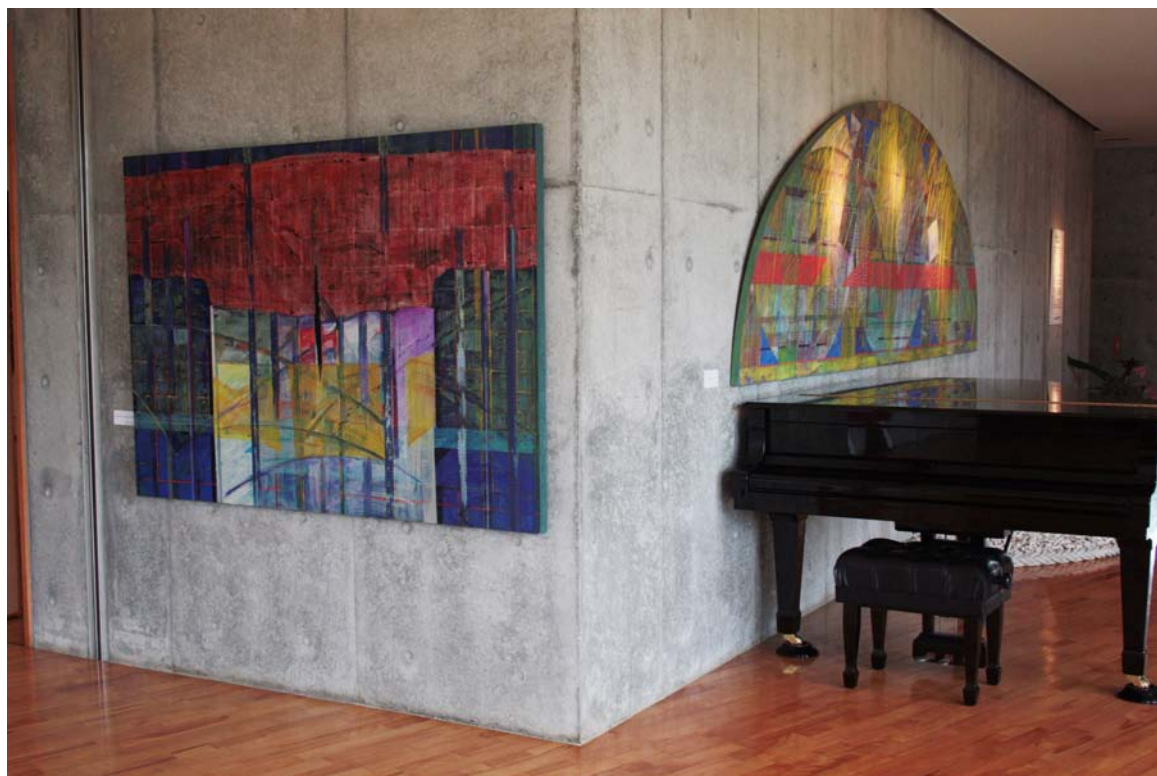


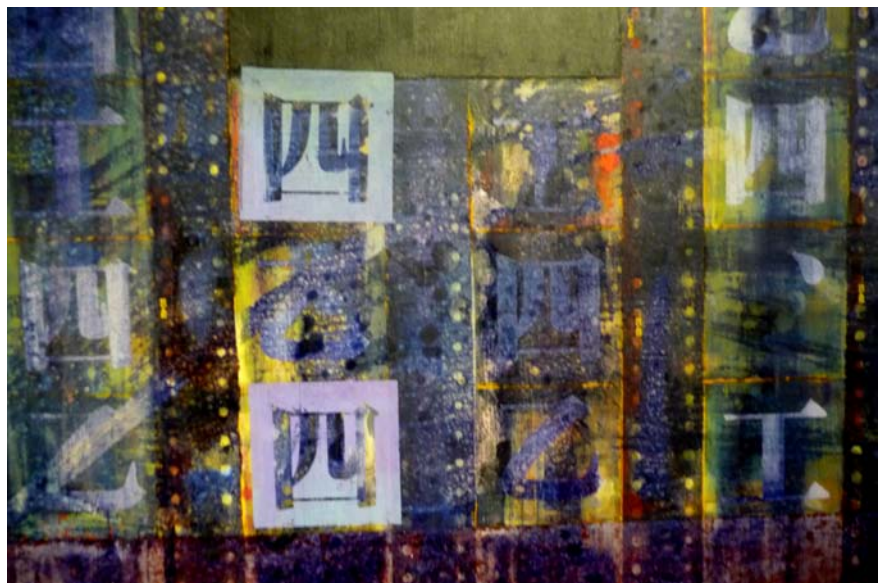




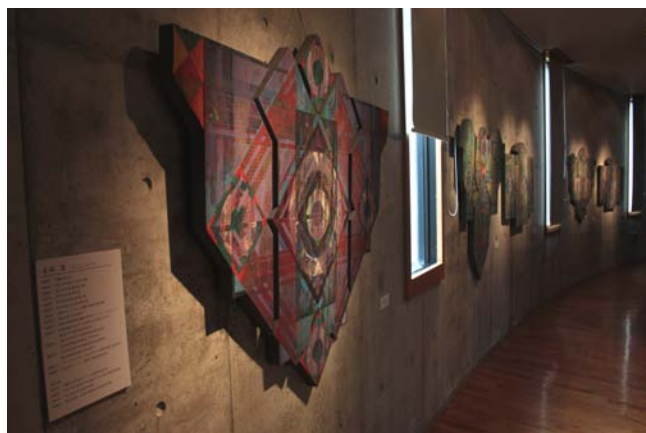








作品部分



右ページの曲「Triple sugar」は同タイトルの絵画作品の音版として作曲した。
繰り返される工工四に、
バッハのピアノ曲ゴールドベルク変奏曲の15番と21番の右手部分を変化させて重ね、
さらにラジオの周波数を採る音として、2009年の沖縄にあるノイズを幾重にも重ねた曲である。

<http://homepage.mac.com/mkingmking/>
「金城満の仕事」で検索



原爆の光によって壁に出来たシルエットの人影
一瞬にして人体は気化し
影だけがそこに居た人を照らし出す
感光した歴史
この関係の変異からみえてくるもの

光と影
ポジとネガ
そして
遠く離れたところ

網膜の視神経が入ってくる部分には
光を感じない盲点がある
盲点とは言語上の意味だけでなく
本当に存在している身体の点
盲点は光を感じるために必要な点

この点をのぼして考える
盲点から盲線、盲線から盲面

盲点が動くと盲線になる
線の形は点の動きで決まる

盲面は盲線に囲まれて出来る場合と
盲線のスライドで出来る

始点である盲点が光を感じないなら
闇である
言い換えると、闇点、闇線、闇面である

歴史に光をあてる・・・と言うが
歴史に闇をあてる・・・とは言わない
この段階で片手落ちの見方が生じている

闇は、単に負の面を強調した見方ではなく
光と対をなした同時性の見方だろう

光も闇も歴史に潜り込む浸透性があり
光は盲点を、破線の盲線に変え
破線の盲線はやがてランダムな島を形成する

島影を俯瞰していく感覚がアートなのか
島影を渡っていくのが歴史なのか

今は浮遊感の強い政治情勢であり
今日、明日にも
島影が変異させられるニュースの時代である

嫌な予感と良い兆しが
同時に起きている・・・

2009/12/09

2009/10/07～2010/01/18

第 18 回個展・佐喜眞美術館 in Ginowan
金城満展 2009

-Triple Sugar「ぬけがらの音」-
プレゼンテーションレジュメ

日時：2009年11月23日（月）14:00～

会場：佐喜眞美術館

使用ソフト：Keynote

時間：40分（映像含む）

第 17 回個展・画廊沖縄での Sweet400 シリーズと、
関連しての展覧会のためプレゼンテーションレジュメも
重複している。従ってその部分は省略して、追加部分の
みの記述とした。

1. 本日の内容

(重複のため省略)

2. 起請文

(重複のため省略)

3. 砂糖について

(重複のため省略)

砂糖の甘さと沖縄の状況を重ね合わせて

以下 Sweet400 シリーズに追加部分

・・・との思いから半年後、次の事実があることを知った。

重い病気から来るかゆみがある

(1)がん等が原因で全身に強いかゆみを感じる場合がある。

(2)その原因を探っていくと・・・

(3)正体は進行したがん患者の痛みを抑えるためなどに使用される「モルヒネ」

(4) このモルヒネによく似た物質 「βエンドルフィン」が体内でたくさん作られていたためにかゆみを感じる。

(5)βエンドルフィン「おいしいものを食べる」「熱いお風呂に入る」「長距離マラソンを走る」など、快感を感じた時や、苦しみを和らげる必要がある時に脳で作られる「快樂物質」。

(6) 一体なぜ、この物質がかゆみにつながるのか？

(7)脳は体内に大きな病気があると、快樂物質であるβエンドルフィンを大量に放出してストレスを和らげようとする。

(8)しかし、そのままではピンチを知らせるシグナルが脳に届かない恐れがある。

(9)実は、かゆみを伝える神経にはβエンドルフィンを受け取る受容体がついていて、異変をかゆみとして知らせる。

(10)かゆみは重大な病気があることを教えてくれる、貴重なシグナルだった！

4. 作品の構成要素

(重複のため省略)

5. 制作のプロセス

(重複のため省略)

6. その他の展開

(重複のため省略)

美術月評

<10月>

—— 土屋誠一

今月から、本紙美術月評の担当の一員に加わることに。可能な限りの丁寧な、作品や作家、そしてそれらを取り巻く状況を見ていきたいと思う。私自身、今年になって県立芸大に赴任してきたばかりで、沖縄の美術状況に詳しいとは言えない。ただ、評者の中に一人ぐらいは、そんな人間が異物として混ざっているのも、美術月評としては悪くはないだろう。散文的な日常に対して、文字通り「異物」として存在することにおいて、その存在意義を持つものをこそ、私たちはそれを美術と呼ぶのだから。

将来の可能性を切り開く美術作品を生み出そうと望むならば、結局のところ、自らを自立した表現者として自覚することからしか始まらないだろう。逆に言えば、既成の権威や枠組みを逆手にして作品を表現したところで、可能性が開かれるわけはない。むしろ、

だ。例えば、県立博物館美術館で開催された「平成21年度 沖縄県芸術文化祭の展示部門(10月18日)は、既に38回目を迎えた」とのこと、こうした催しに対して一定の需要があることは認めざるを得ない。けれども、果たしてこれから美術における「将来の可能性」は開かれるのだろうか。残念ながらここに並んだ公募作品の中から、そのような可能性が垣間見える作品を見いだすことはできなかった。



つちや・せいいち 1975年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院修了。美術批評家。2009年4月より県立芸術大学講師。



つちや・せいいち 1975年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院修了。美術批評家。2009年4月より県立芸術大学講師。

つたほうがいい。なぜなら、まさに私たちを取り巻く散文的な日常こそが、意識しないうちに制度化されているものにはかならないからであり、そのような日常に対して疑義のまなざしを向けることが、制作することの第一歩ではない。

日常の知覚化に注意

言葉の異物で緊張感

沖縄美術史の基礎に

森光理展
金城満展
鎌倉芳太郎展

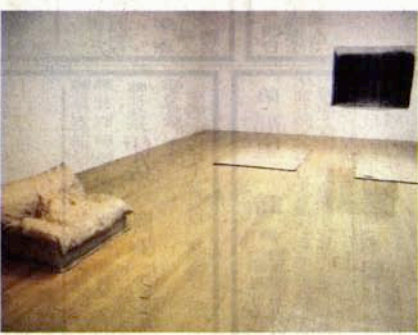


「紅型型紙をよむ」鎌倉芳太郎の「1414枚」より「流水松鳥模 様白地型紙」

異才の衝撃を伝える

鎌倉芳太郎展

つたか。非日常的な場である展示空間に、日常を対置したところで制度化された美術を乗り越え得るものではない。現在を生きる美術作家として



森光理展「eyelid」より会場風景



金城満「sweet 400-sugar coat-1」



「名渡山愛順展」より「三人の女(色)、裸のウツク」

しき言葉が重ねて記され、さらに、さまざまな絵の具が画面上に塗りこまれている。比較的大きなタフローである。伝え聞くところによると、作家はいわゆる1978年の「730」の記憶から、通行指示の文句を導き出したものである。なほこの、工五四と通行指示との共存とは、近代以前の沖縄と、「復帰」以後から今日に至る沖縄とが、

するかのように、何度も塗り替はれ取り取られたかのような広い色の面、そして円弧をなす線が描き込まれている。これらの要素は、画面に書き込まれた文字の可読性を著しく低減させ、分かりやすい「意味」を読みとることを、見る者に困難にさせる。それは、工五四や「730」といういかにも沖縄らしい「意味」だけで理解できるほど、沖縄は単純ではないということを暗に表明しているかのようである。言葉と異物を画面に放り込むことで結果的に、作品を一義的に理解することを拒むような緊張感を、絵画に与えているのである。

だ。このような美術史的アプローチのほうが目を引いて、同時代の美術表現としては、金城の個展くらいしか見るべきものがなかったというのをも正直なところだ。このことを沖縄における美術の停滞と見るか、それとも単に今月は見るべき展覧会が少なかっただけであると判断するべきか、ともあれ「異物」の立ち上がる様が存在するのなら、月評者としてはそれを見逃さないようにしたいものである。

10月はそのほかに、「長浜美佐子版画展(沖縄残波岬ロイヤルホテル)」「ロイヤルギャラリー1」(9月29日)、「12月」(ウエチヒロ土絵展)、「12月」(高良憲義個展)、「那覇市民ギャラリー」(10月27日)、「11月1日」などがあった。(美術批評家・県立芸大講師)

沖繩タイムス

展 評

山田 高

今時の金融危機に際し、彼の国の女王陛下が「なぜこのような事態を予測できなかったのですか」と同国の経済学の重鎮たちに問いただしたのに対して、学問としての威信が失墜したことに狼狽しながらも何とか答えたという。想像力が欠如していたのです」と。

そう、問題は「想像力」だったのだ。ある年代の左翼の人士にはノスタルジックにさえ聞こえるはずのこの言葉が、保守の牙城を担う者の口から図らずも漏れてしまう、これが今という状況なのだろう。経済学はさておき、しかしこれは芸術と呼ばれるものが当たり前のように前提としてき

た能力でもある。つまり、感受性という能力である。

開館以来、〈思い〉の場と、すぐれて「想像力」感

金城満展



「Tripple sugar」『ぬけがらの音』(2009年、2333×4800mm、顔料、ニカワ、箔、油彩、板)

生の具体性体験させる

性」の空間を提供してきた佐喜眞美術館で金城満氏が個展を開いている。それも「薩摩侵攻400年」をテーマとして。

作品は、トートメーを思わせるパネルを組み合わせたシリーズと、100号を超す大作のシリーズからなる。いずれにもsugar、もしくはsweetというタイトルが付けられているのだが、しかしこれに甘い心地よさを連想してはならない。むしろ、

現実のサトウキビに対する「感性」が必要だ。つまり皮膚を傷だらけにするほど鋭い葉を幾重にも伸ばし、その甘い芯の汁をすすするには頑丈な歯とあごを持たなければならぬほど堅い皮を持っている実際の、現実のsugarに対して。

事実いずれの作品も、混色を幾重にも重ねた画面は、sweetなとはほど遠い、さまざまな苦悶の音がわき出てくるような、深い闇の奥の

ようにも見える。その印象から飛躍して言えば、このsugarとは薩摩、ないし日本近代を表し、それは名(タイトル)ばかりのものであり、実際の現実、つまり沖繩(表現された画面)の苦い、

怨嗟の歴史がそこに描かれているのではないか……。さらにまた、呪文のように縦に走る工四の背後に見え隠れする、交通法規らしき文言はまた、別の「想像」を刺激するのだが…。

90年代半ば、例の米兵による暴行事件をきっかけとした「沖繩の怒り」に共鳴するよう、金城満氏はこの場で、『石の声』という沖繩戦での死者の〈数〉を体験させるというパフォーマンスを行った。氏の表現は常にわれわれに何かしかの体験を強いる。その体験はしかし、簡単に言葉にしうる類のものではない。それは、先に述べた「想像力」によってしか見えてこ

ない実際の、現実の「具体性」のようなものではないだろうか。

戦争にしろ、歴史にしろ、過去に起こったことを単に画像で説明したり、物語るのではなく、見る者の側にその「具体性」を体験させること。それはつまり、「物語る」という程よい距離に収まったまま現実、あるいは歴史を理解した気にさせる装置を失効させ、生の「生きた具体性」を体験させること。沖繩にしろ、世界にしろ今求められ

ているのは、そうした「具体性」を感受しうる想像力だ。

◇ (グループZO同人)

「金城満展2009-Trippe sugar」『ぬけがらの音』は2010年1月18日まで佐喜眞美術館で。23日午後4時から、金城氏によるアーティスト・トークが開かれる。問い合わせは同館、電話098(8993)5737。

展評

三島 わかな

「記録には残されていないけれども、さまざまな人々が、さまざまに生きた思いをイメージすることが大事なんだよな」と、ある方がボツリと語った。

これは先日、とある宴席で耳にした言葉だ。その含意については、筆者も長年にわたって考え続けてきたことだった。とはいえ、その言葉がより大きく立ちほだかり、悶々とした心持ちでいた。

歴史を叙述することを志す筆者にとって、記録として残されることのなかった、さまざまな人々の思いを叙述することは、とてもとても困難なこのように感じられる。そのわけは「歴史」の叙述があくまで、制限つきのもにすぎないからである。というのも、史料という「史的証

拠」をもつてのみ、初めて語ることができなのが歴史である。言い換えれば、後世による人為的な作業を経て再構成されたものが「歴史」であり、そこには当然ながら、史実として確定さ

金城満展2009～Triple sugar～「ぬけがらの音」

時空越え心の日で対話

れたものよりも、はるかに多くの出来事が、叙述されずにいる。そういった過去について、今に生きる私たちは、何を根拠として叙述すれば良いのだろうか。そのことは、歴史をつづる者

にとって、切実に向き合わねばならない課題であり、永遠なるとてもない課題に思われる。

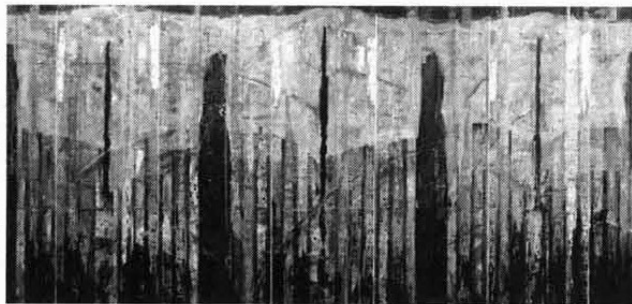
そのような心持ちの中、「だからこそ、この世に、芸術は存在する」と、放言したい気持ちにかられた。歴史と芸術は、相互補完の関係にあると感じた。芸術創作において、制限されることは何ひとつない。その源泉は、作家の内なるイマ

ジネーションにある。だからこそ、歴史では叙述できない事象についても、芸術の力をもって、私たちは、それを体現することができるとだ。

筆者の心中に、そういった衝動と確信とを喚起させたのは、「金城満展2009～Triple sugar～「ぬけがらの音」」である。筆者の知る限り、氏は常に、沖縄（過去、現在、そして未来）

としての二十四などが、無味乾燥な響きを放っている。そう感じるのは、筆者ひとりではあるまい。

目には見えないモノや、耳には聴えないモノに対するまなざし（センサー）を、氏は、いつ何時も注ぎ続けて（張り巡らせて）いるのだらう。たとえて言うなれば、セミの抜け殻には、もはや生命が宿ってはいないが、氏には聴こえるのだ。幼虫のころ、土の中でさざやいたであろう静なる声か。そして、ふ化して地上の陽光を浴び、全身全霊で放ったであろう魂の叫びが。それは抜け殻であって、抜け殻ではない。時空を越えて往来しながら、心の目で対話し続ける作家の世界観が、そこには、限りなく広がっている。



「Triple sugar」

と取っ組み合ってきた。そんな氏の創作の世界にたずみながら、注意ぶかく、そうと耳をそばだててみると、歴史の闇に余儀なく葬られてしまった、声なき声が聴こえてくるのではないか。その一方で、声なき声をかき消してしまわんがごとく、事実として、きちんと叙述されてきた近現代を象徴する事象（氏が使用したモチーフは、交通法規や、「記号」

）(近代沖縄洋楽受容史研究、沖縄県立芸術大学講師)

◇

「金城満展」は1月18日まで、宜野湾市の佐喜真美術館で開催。火曜日休館。年末年始は12月31日、1月1日が休館となる。問い合わせは同館 ☎098 (893) 5737。

新
09/1222

「何でもないのかゆみを感じることがある」と語るのは、宜野湾市上原の佐喜眞美術館で展示会「金城満展2009-Trip e sugar」『ぬげがらの音』を開催中の金城満さん＝写真。

「心地いいのか不快なのかよく分からない『甘いかゆみ』。ぼくも時折感じるが、最近、それが気のせいではなく、重い病が原因の場合もあると知った」と話す。「甘いかゆみ」は、脳内の快樂物質の過剰な放出で生まれ、体の異変を教える重大なシグナルだそう

あしやぎ



「甘いかゆみ」

だ。そうした「かゆみ」と沖繩の現状を重ね合わせ、着物を広げた形や「工四乙四」と書いた工四四、言語で表現した交通標識が重なり合った作品が生まれた。

11月23日のアーティストトークでは、三線の音に混じり、英語なまりの平板な日本語やラジオのチューニングの音など、さまざまに音や言葉が重なり合う音楽を流した。

「ただ言葉の上に言葉が重なり合って消していくだけで、何かが構築されるわけではない」。作品を基に作成した音楽と作品を見詰めながら、来場者は沖繩が置かれている現状に思いをはせていた。

年末回顧 県内⑥ 美術

佐藤 文彦

政権交代、沖縄問題などで揺れ動いた2009年であったが、県内における美術界の流れはこのようなものであったか。

本来、美術または美術館の役割は人に感動を与え人類共通の過去、現在から未来へ誘う「方筆鏡」のようなものだ。

一方で、沖縄という特異な地域であるならば、徹底して沖縄の歴史的風土、文化、思想にこだわり、沖縄独自の表現様式を世界に向けて発信することも大事なことと思う。このような観点からこの一年を顧みたい。

まず、開館2周年を迎えた県立博物館・美術館の企画展。昨年未だに開催された「美術家たちの南洋群島」は、これまで断片的な知識しかなかった日本の植民地であった時代背景と作品のルーツが体系的に展示された。これによつ

て、沖縄を代表する備前比呂志の出自(杉浦佐助や土方久功との関係)が明るみに出て、沖縄美術史の特異な一面をのぞかせた。

同館の開館1周年記念展「移動と表現 変容する身体・言語・文化」では移動を

新しい芸術の流れ模索

テーマに、沖縄の画家たちが米軍占領下におけるニシムイとよばれた美術村や、沖縄を出立し沖縄と向き合い独自の表現様式をつくり出したアーティストたちを紹介し、それに伴うシンポジウムなども開催されたが、このテーマからわかるように沖縄の特異性やアーティストに焦点をあてていることが明確に出た。

それはまた、表現の自由の侵害か、教育配慮かでもめた「アトミックサンシャインの中へin沖縄ー日本国平和憲法第九条下における戦後美術」展においても、沖縄の現代アーティストの作品を可能な限りの展示したことによってその濃厚なコンセプトを感じさせた。以降「豊潤の美を求めてー金城安太郎と高島華宵」展、「琉球絵画展」「オキナワデザイン」の現在、「名渡山愛順展」へも引き継がれ、改めて沖縄の多様な表現

者たちの存在を知らしめた。浦添市美術館の催しでは「琉球・沖縄2人展」比嘉康雄「琉球の祭祀」東松照明「チューインガムとチョコレート in 沖縄」「王国時代の琉球収蔵品展 葛飾北斎「琉球八景」・「琉球交易港図屏風」を中心に、「吉水ます子絵画展」「バリバリーワヤン!?」バリ島影絵芝居の世界、「展」「金城清子絵画展」「風の画家/中島深の世界展」

「片岡鶴太郎展」などがあり、琉球漆器の常設に加えて多様な企画展が多かった。一方、果敢な反戦思想を世界に発信している佐喜眞美術館は開館15周年を迎えた。丸木夫妻の「沖縄戦の図」をメインにして「丸木位里水墨画展」「大道あや展」「ゲート・コルヴィッツ展」など所蔵作品展を展開。また、山城知佳子の意表をつく映像作品「あなたの声は私の喉を通つた」を公開した「アトミック・サンシャインの中へin佐喜眞」、「比嘉豊光写真展」「オサムジエーム又中川写真展」「金城満展」など、沖縄戦とのかかわりを持続させた企画が刺激を与えた。

面廊ではニューヨーク在住のアーティスト、照屋勇賢の沖縄での初個展も開催。個展「Cut」では、薩摩侵攻時の琉球国王尚寧をはじめと

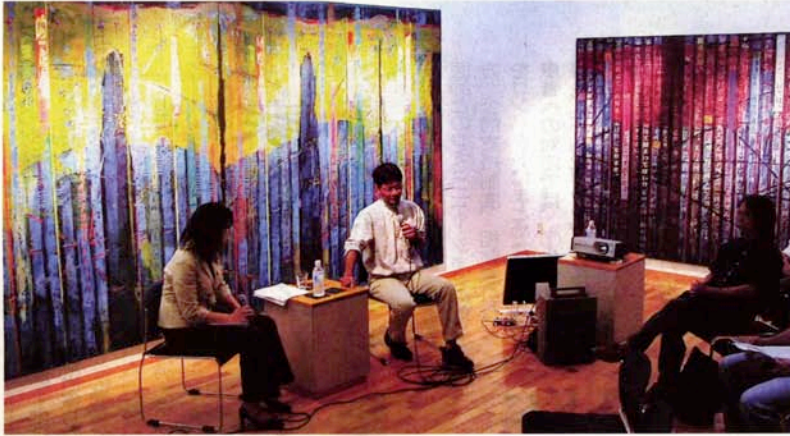
「アトミックサンシャインの中へin沖縄ー日本国平和憲法第九条下における戦後美術」展においても、沖縄の現代アーティストの作品を可能な限りの展示したことによってその濃厚なコンセプトを感じさせた。以降「豊潤の美を求めてー金城安太郎と高島華宵」展、「琉球絵画展」「オキナワデザイン」の現在、「名渡山愛順展」へも引き継がれ、改めて沖縄の多様な表現

た」を公開した「アトミック・サンシャインの中へin佐喜眞」、「比嘉豊光写真展」「オサムジエーム又中川写真展」「金城満展」など、沖縄戦とのかかわりを持続させた企画が刺激を与えた。

面廊ではニューヨーク在住のアーティスト、照屋勇賢の沖縄での初個展も開催。個展「Cut」では、薩摩侵攻時の琉球国王尚寧をはじめと

高、安室奈美恵らが紅型技法で作品化された。「儀保克幸展」(ここにいるわたし)は、沖縄戦時に撮影された少女の無垢なまなざしからイメージして、木彫、平面のインスタレーションで表現した。ほかに、「与儀達治作品展」(タイムスギャラリー)など、沖縄戦後の状況を思索し、大きなキャンバスに隠喩法を用いつつ重厚なマチエールを表現している作品が見られた。

(県立芸大非常勤講師)



「Sweet 400」シリーズを出品した金城満さん(中央)＝沖縄県宜野湾市の佐喜真美術館

金城満さん 抽象画「Sweet 400」 浮かぶ 沖縄の閉塞感

米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)のフェンス際に立つ佐喜真美術館に、沖縄のアーティスト金城満が抽象画の「Sweet 400」シリーズを出品した。薩摩藩による琉球侵攻(1609年)から、普天間移設問題に揺れる現在まで、常に自己決定権を奪われてきた沖縄の約400年を重層的に浮かび上がらせる作品群だ。

薩摩支配から基地問題 自覚される「甘いかゆさ」



佐喜真美術館から見た米軍普天間飛行場のヘリコプターの航跡＝沖縄県宜野湾市

最新作「Triple s

顔料や油絵の具を分厚く塗りにたくった大小の作品に目を凝らすと、もともと素地には原簿用紙の升目が引かれ、沖縄の人々がこよなく愛する琉球古典音楽の楽譜「二十四」が、全面に刷り込まれていたことに気付く。

そこに上書きされた、決まり事や禁止事項。「重さを測定する単位と方法」「交差点の直前で一時停止です」「…してはいけません」「…しなければなりません」。これらの活字には、薩摩支配や、明治政府による琉球処分(内国植民地化)、そして戦後の米軍統治を経て軍事基地が固定化されていった沖縄の歴史が象徴されている。工

四と共に、重ね塗りの色彩の底に深く沈み、とぎれとぎれに読み取るのがやっとだ。

か、全面に刷り込まれていたことに気付く。そこに上書きされた、決まり事や禁止事項。「重さを測定する単位と方法」「交差点の直前で一時停止です」「…してはいけません」「…しなければなりません」。これらの活字には、薩摩支配や、明治政府による琉球処分(内国植民地化)、そして戦後の米軍統治を経て軍事基地が固定化されていった沖縄の歴史が象徴されている。工

「砂糖の甘みは幸福感に満ちている。しかし肥満や病気につながる、習慣性や依存性もある」と金城は言う。「心地よいか不快なのか、体のどこかがかゆい。かゆさは、自覚しようとする」と静かに移動している。

か、全面に刷り込まれていたことに気付く。そこに上書きされた、決まり事や禁止事項。「重さを測定する単位と方法」「交差点の直前で一時停止です」「…してはいけません」「…しなければなりません」。これらの活字には、薩摩支配や、明治政府による琉球処分(内国植民地化)、そして戦後の米軍統治を経て軍事基地が固定化されていった沖縄の歴史が象徴されている。工

「砂糖の甘みは幸福感に満ちている。しかし肥満や病気につながる、習慣性や依存性もある」と金城は言う。「心地よいか不快なのか、体のどこかがかゆい。かゆさは、自覚しようとする」と静かに移動している。

か、全面に刷り込まれていたことに気付く。そこに上書きされた、決まり事や禁止事項。「重さを測定する単位と方法」「交差点の直前で一時停止です」「…してはいけません」「…しなければなりません」。これらの活字には、薩摩支配や、明治政府による琉球処分(内国植民地化)、そして戦後の米軍統治を経て軍事基地が固定化されていった沖縄の歴史が象徴されている。工

ルはかゆみとして神経に伝達されるという。

金城の指摘は、今の沖縄県民の閉塞感を推し量る上で示唆的だ。本来、基地の受け入れと見返りに国が地元にはらまく巨額のカネや、毎年必ず値上がりしていく軍用地代という不労所得は、沖縄が望んで得たものではない。

しかし国は在日米軍への基地提供という、日米安保体制の根幹維持のために、痛みを和らげる「モルヒネ」を沖縄に注入する必要があった。これに対し県民は、県外・国外への基地移設を積極的に求め始めた。不快なかゆみがはつきり自覚された今、対症療法はもはや限界にきている。

金城の指摘は、今の沖縄県民の閉塞感を推し量る上で示唆的だ。本来、基地の受け入れと見返りに国が地元にはらまく巨額のカネや、毎年必ず値上がりしていく軍用地代という不労所得は、沖縄が望んで得たものではない。